よみがえれ、琵琶湖のゆりかご、南湖

【南湖再生への取り組み】

豊かな湖づくりをめざして

今シーズンのビワズ通信は、
人と湖と魚たちとの関係を取り戻し、
より豊かな湖をつくろうとする
地域の活動を紹介しています。
冬号では、かつてはセタシジミの
格好の漁場であり、
ホンモロコやニゴロブナの産卵に
適した豊かな水域だった南湖の復活をかけ、
国や自治体、地域、企業が
しっかりとスクラムを組んだ
「南湖再生への取り組み」について
ご紹介します。

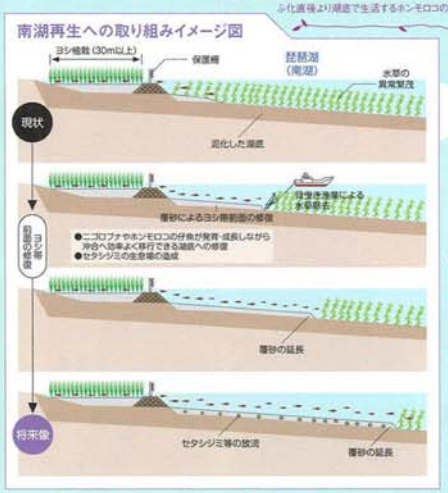
琵琶湖のゆりかごと謳われる南湖

まず、南湖とは琵琶湖大橋が架かる湖の最も狭い部分から南側を指します。その面積は北湖のわずか11分の1に過ぎず、水量については北湖の273億トンに対して、南湖は2億トンと北湖の1パーセントにも満たない水の量です。さらに、北湖の平均水深約43メートルに比べ、南湖は約4メートルときわめて浅い水域といえます。しかし、太古から南湖はさまざまな魚の産卵・成育に欠かせないエリアとして知られ、琵琶湖のゆりかご」と呼ばれています。ホンモロコを例にとると北湖で成魚に育つと2月頃からゆっくりと南に移動し、春には南湖にやって来て岸辺などに産卵します。4～6月にふ化し、一定の大きさに育った稚魚は、やがて成育しながら南湖から北湖へと向かいます。かつては、3月頃になると産卵のために移動する魚を求めてホンモロコ漁の船が、琵琶湖中から南湖の北方に集結しました。また、南湖はシジミ漁の漁場としても活況を呈し、昭和32年には、約6000トンを超える漁獲量の6～8割が狭い南湖で獲れました。しかし、昭和30年代頃から水質が悪化し、さまざまな環境が変化すると、南湖は次第にその豊かさを失っていきました。

ふ化直後より湖底で生活するホンモロコの稚魚にとって砂地は成長に欠かせない環境です。

国家的プロジェクトを受けた再生への取り組み

現在の南湖は外来種の増加も加わり、生態系は危機的状況にあるといわれています。そこで国や自治体が連携し、南湖の復活に向けた道を拓こうと平成18年12月にスタートしたのが南湖再生への取り組みです。これは、国の都市再生本部の設置に端を発し、平成15年に閣議決定された「琵琶湖淀川流域圏の再生」を受けて設けられた再生推進協議会の中の「水辺の生態系保全再生・ネットワーク分科会」の活動のひとつです。この活動には、国・県・関係自治体の各機関が参加。平成18年より会議を開き、再生に向けた動きや連携について話し合うとともに、活発な情報交換を行っています。



南湖再生への想いを語る滋賀県水産課の藤原公一参事

魚介類のための貴重な生息環境を回復

南湖再生への取り組み事業のひとつとして、滋賀県、水産庁、水資源機構、国土交通省が連携し、平成18年より「南湖湖底環境改善事業」が始まっています。取り組みの中心となる滋賀県の農政水産部水産課の藤原公一参事にお話をうかがいました。

「いま、私たちが取り組んでいるのは、セタシジミが棲み、ホンモロコが繁殖できるような、かつての南湖に近い環境を取り戻すための2つの事業です。まず、ひとつ目はセタシジミやホンモロコの産卵・成育に欠かせない砂地を増やす取り組みです。南湖では昭和44年に7～9ヘクタールあった砂地が、平成元年には1～5ヘクタールにまで減少。そのため、水産庁の委託を受けて滋賀県漁業協同組合連合会が主体となってマンガンとよばれる貝曳き漁具を使って、湖底を掘り起こし、かつての砂地に戻す作業を進めています。さらに、この作業は湖底の耕うんと同時に、異常繁茂によって魚介類の生息環境にさまざまな悪影響を及ぼしている水草を除去することができ、豊かな漁場を取り戻すために一石二鳥の成果が期待できます。そして、2つ目は、ヨシ帯の沖において、既存の砂地と湖底の耕うんによって回復した砂地に進なる湖底に新しい砂を入れる事業です。この覆砂という取り組みによりセタシジミの生息空間を広げ、またヨシ帯でふ化したホンモロコが成育しながらスムーズに沖合へ移動できるようになります。覆砂事業は滋賀県が実施し、覆砂に使用する砂は、国土交通省が瀬田川を浚渫したものを有効活用、それぞれの連携によって事業が着々と進行しています。」

計画では、湖底耕うん事業によって120ヘクタールの砂地を回復させ、覆砂事業で64ヘクタールの砂地を造成。併せて昭和44年当時の約半分にあたる335ヘクタールの砂地を取り戻すことを目標としています。さらに、平成17年に約160トンだったセタシジミの漁獲量を平成30年には倍の320トンとし、そのうちの160トンを南湖で水揚げすることを目標にしています。

官民一体となった新浜うおじまプロジェクト

水資源機構では、近江大橋の東岸にある新浜地区の管理用地にコイ科魚類等の産卵・成育の場となる田んぼ池（ビオトープ等）をつくる「新浜うおじまプロジェクト」に取り組んでいます。

プロジェクトの用地となるのは、土砂などの仮置き場として水資源機構が所管している約5ヘクタールの広さの土地ですが、以前から草津市と新浜自治会から景観整備や有効活用の要望が寄せられていました。さらに、幹線道路をはさんだ用地のすぐ東側にはイオンモール株式会社による大型ショッピングセンターの出店が計画されていました。

かねてより環境保全に大きな関心を持ち、琵琶湖畔にほど近い場所への出店に際し、地域や琵琶湖の自然環境に貢献できる企業活動を検討していた同社は、地域の人々が集い、子供たちが水辺の自然に触れることのできるビオトープを中心としたこのプロジェクトに参画することとしました。

新浜うおじまプロジェクト整備計画平面図

生命のゆりかごを目ざす、南湖初の田んぼ池

約5ヘクタールの土地の半分を占める田んぼ池には琵琶湖の水を引き込み、魚がそ上できるように魚道を設けました。また、外来魚の侵入を防ぐために20センチの段差をもつ階段式の魚道とし、3月にはビオトープの完成を予定しています。

すでに国土交通省琵琶湖河川事務所によって周辺湖岸での産卵調査が行われ、コイやフナの産卵も確認されています。運用開始後は、地域にも呼びかけ、自然観察会の開催を計画しています。

これまでビワズ通信でも、北湖の高島市などで実施している魚をふやす取り組みを紹介してきましたが、「新浜うおじまプロジェクト」は、南湖での結果と併せて、新浜での活動によって得たデータを琵琶湖の固有種や在来魚の回復に役立てるとともに、南湖の再生を目ざします。

苗々と整備が進む新浜うおじまプロジェクトの田んぼ池

おたより紹介

○大阪から、琵琶湖へ行き、滋賀県の幸をたくさん頂きました。湖魚佃煮や、コイの甘露煮、フナ南蛮やしじみ飯、どれもおいしく、今まで目をむける事のなかった淡水の幸を見なおした所です。この冊子で紹介の沖島にも、記事を読んで興味をもちはじめました。淡水の湖に浮かぶ島に住み、半農半漁の生活をするなんて、はじめて聞く話です。ぜひ、一度、沖島をたずねてみようと思いました。ビワズ通信はとてもおもしろかったので、また新たな号をみかけたら、読んでみようと思います。

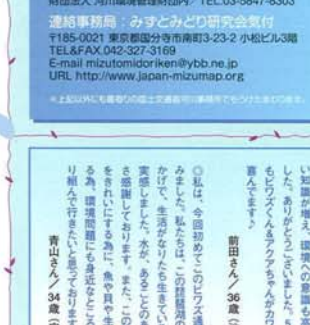
坂井さん／20歳（堺市）

○今日、家族旅行で立ち寄った道の駅、あいの土山。ビワズ通信を見つけ、早速拝見しました。沖島という美しい島がある事、昔から漁業がさかんな事など新しい知識が増え、環境への意識も高まりました。ありがとうございました。5才の娘もビワズくん&アクアちゃんがカワイイと喜んでますよ♪

前田さん／36歳（茨田市）

○私は、今回初めてこのビワズ通信を読みました。私たちは、この琵琶湖の水のおかげで、生活がなりたち生きているのを、実感しました。水が、あることのありがたさを感謝してします。また、この琵琶湖をきれいにする為に、魚や貝や生物を守る為、環境問題にも身近なことから取り組んで行きたいと思っております。

青山さん／34歳（甲賀市）



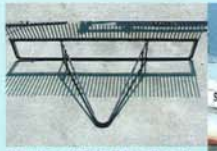
○琵琶湖の歴史が簡潔に描かれています。深泥池もずいぶん古いのですが住宅排水などで大気荒れています。琵琶湖は大きいだけに大変だと思います。今後とりあげてほしいテーマは近畿の水鳥としての琵琶湖、関東地方とは大分違います。高松、福岡美々、最近水が復活しやすくなったのですが、大阪京都の人々は琵琶湖にもっと関心を持つべきです。私の住むならは主として、紀の川水系に依存しています。

大野さん／75歳（北葛城郡）

○ビワズ通信秋号を拝読しました。沖島の記述中に漁法が紹介されていましたが以前、琵琶湖の漁法のひとつに「おいさで漁」と言って、カラスの羽根を長竿にふち下げて稚魚を取る実にユニークなのが有ると聞いていました。「嘘い記憶なので間違っていれば」容赦下さい」琵琶湖の恵みを受けている私にとっては琵琶湖がいつまでも豊かであって欲しいと願うばかりです。

斎田さん／58歳（大阪市）

プロジェクトの推進を担当する（独）水資源機構 琵琶湖開発総合管理所の小島湖南管理所長（左）と杉村環境課長（右）



湖底の耕うんに使用する貝曳き漁具マンガン

耕うんと同時に行われる水草の除去作業のようす

参加募集
しらべにいこうよ、川・池・湖
第5回
身近な水環境の全国一斉調査

全国で同じ日に、身近な川や池、湖などの水の汚れを自分たちでしらべるイベントです。おなじたもこ家族やお友だちと近所の水辺をしらべてみませんか？

2008年6/8日

測定項目 気温・水温・COD、その他
測定方法 調査マニュアルと調査キットにもとづき測定（参加希望者に2008年5月ごろに無料で配布します）
参加申込 所定の申込用紙に必要事項をご記入の上、下記の連絡事務局（みずとみどり研究会）に2008年3月10日（月）までにご送付ください。
なお、ご記入いただいた個人情報は今回の調査に関する連絡以外に、ご本人の許可なく使用しません。参加申込された団体名はホームページで公表させていただきます。

［お問い合わせ先］
事務局：全国水環境マップ実行委員会
〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町11-9
財団法人 河川環境管理財団内／TEL.03-5847-8303
連絡事務局：みずとみどり研究会気付
〒185-0021 東京都国分寺市南町3-23-2 小松ビル3階
TEL&FAX.042-327-3169
E-mail mizutomidoriken@ybb.ne.jp
URL http://www.japan-mizumap.org
※上記以外にも最寄りの国土交通省河川事務所でもご対応致します。